シマエナガ

アオバト

アカゲラのひな

とかちの野生動物

野 鳥

Wild Birds

国立大学法人 北海道国立大学機構
帯広畜産大学
野生生物保全管理技術養成事業

山野の鳥
Forest Birds

シマフクロウ

日本では北海道の道東地域を中心に生息する大型のフクロウで、魚を好んで捕食します。十勝川沿いのアイヌはコタンコロ・カムイ（村を支配する神）と呼び、この神はクマの行動を監督しているので、悪いクマが危害を加えそうになったときに、この神に頼むと救ってくれると言い伝えられています。環境省のレッドデータブックで絶滅危惧IA類に指定され、推定生息数は165羽です。近年はやや増加傾向にあり、2023年には過去最多の47羽のヒナが全道で、うち十勝管内では7巣で10羽のヒナが確認されました。

シマフクロウ

巣箱を利用するエゾフクロウ

エゾフクロウ

村の守護神であるシマフクロウの使いであると言われ、クンネレㇰ・カムイ（夜叫ぶ神）とよばれています。フクロウはネズミ類を好んで狩るため、青森県ではリンゴ園の害獣のハタネズミの防除にフクロウが役立っています。北海道でも巣箱でフクロウを誘致して、エゾヤチネズミなどの防除や環境教育に役立てようという試みがされています。特に冬場に人為的環境にも進出し、道路上で餌をとることがあるので、ロードキル（野生生物の交通事故）の被害を受けることが比較的多い鳥です。

クマゲラ

枯死木などに残るクマゲラの採餌痕が細長い形をしているため、この鳥はチㇷ゚タ・チカㇷ゚（船を掘る鳥）と呼ばれています。北海道と東北に分布し、環境省のレッドリストでは絶滅危惧II類に分類され、天然記念物です。十勝管内では大径木のある山間部で繁殖しますが、冬には低地に降りてきて越冬することもあり、本学構内でも稀に観察されています。主にムネアカオオアリやトビイロケアリなどのアリ類を食べますが、マユミやウルシなどの種子も食べます。

クマゲラ

山野/水辺の鳥
Forest Birds / Water Fowls

エゾライチョウ

エゾヤマドリともよばれ、本州のライチョウと違い冬でも体色が白くなりません。この鳥が飛び立つときは、大きな羽音で人を驚かせるのでフミ・ルイ（音が強い）と呼ばれています。肉が美味なため現在でも狩猟鳥です。1970年代から90年代にかけては個体数が減り、生息が確認された地域が減少していましたが、2010年代には増加し、近年は回復傾向にあると考えられています。ちなみに環境省のレッドリストでは今時点で「情報不足」となっています。

エゾライチョウのオス

海岸で飛翔するアオバト

アオバト

南日本では一年を通して見られる留鳥ですが、北海道十勝地方では夏鳥で繁殖しています。アイヌには、その鳴き声からワオとかワウと呼ばれていました。名前のアオバトの由来も、鳴き声によるというものと、緑色の体色によるという両方の説があります。群れで海岸に海水の塩分を補給しにくる習性があり、山間部では温泉水も飲みます。木の実が主食で、サクランボを食べに市街地の公園緑地にも飛来します。1970年代から分布が全国的に拡大しており、最も分布が広がっている野鳥の一種です。

オシドリ

春一番にイトウと一緒に川に上ってくる鳥として、チライマチリ（イトウと泳ぐ鳥）と呼ばれています。先のアオバトと同様に1970年代から分布が拡大しており、森林の成熟に伴いオシドリが営巣できる樹洞がふえたことが一因であると考えられています。帯広市では緑ヶ丘公園など市街地の公園緑地でも繁殖しており、餌付けにより人馴れも生じています。カモ類はマガモ、カルガモなど狩猟鳥が多いのですが、オシドリは非狩猟鳥です。

オシドリのつがい

水辺の鳥
Water Fowls

オオハクチョウの飛翔

ハクチョウ類

十勝地方では主に渡りの途中に一時的に滞在する旅鳥ですが、一部の個体は冬にも残り越冬します。オオハクチョウが多く、コハクチョウも若干数が飛来します。迷鳥のアメリカコハクチョウも稀に他の白鳥の群れに混ざって十勝に来たことがあります。帯広の畑や牧草地では主に4月上旬に落ち穂拾いをしている姿が見られます。アイヌの言葉ではレタッチリ・カムイ（白い鳥の神）と呼ばれ、多くの言い伝えがあります。

ガン類

十勝で見られるガン類は旅鳥として渡りの途中に滞在するマガンとヒシクイで、両種とも天然記念物に指定されています。十勝地方ではヒシクイは亜種ヒシクイとオオヒシクイの両方を見ることができます。ヒシクイは嘴（くちばし）の先端にあるオレンジ色の帯が特徴で、これで他のガン類と識別できます。主に十勝南部の湖沼、牧草地や畑でみられますが、渡りの時期には市街地の上空を隊列を組んで鳴きながら飛ぶ姿が見られます。

マガン

ハクガンとシジュウカラガン

かつては日本全土に滅多に来ない迷鳥でしたが、最近ではコンスタントに多くの個体が訪れるようになっています。十勝川河口部ではワシ類や他のガン類と共に、他では見られない多くの珍しい鳥が見られる場所として観光資源としての活用も可能です。一方で農作物の食害や踏圧（土が踏まれ固くなること）などが深刻になればその対策も考えていかねばなりません。

ハクガン

身近な鳥
Familiar Birds

アカゲラ

アカゲラ

市街地の公園緑地や本学構内でも繁殖している十勝では身近な鳥です。アカゲラが繁殖のために掘る巣穴はエゾモモンガ、ヒメネズミ、コウモリ類やカラ類、コムクドリ、ニュウナイスズメなどの繁殖やねぐらとして利用され、それらの動物にとってもアカゲラの存在は重要です。鋭い嘴（くちばし）で木に穴を穿ち、樹皮の下や中にいる昆虫を食べますが、果実やゴヨウマツの実などの植物質も食べます。

シマエナガ

最近はすっかりアイドル化していますが、市街地の公園緑地や本学構内でも普通に見られ、繁殖もしています。一箇所にとどまってさえずることがなく、たえず動き回って移動しているので、じっくりと見ることは難しい鳥です。子育てのための巣は苔とガの繭やクモの糸を使って楕円形のドーム状に編み上げます。アイヌの言葉ではウパシ・チリ（雪鳥）と呼ばれ、この鳥が群れをなすとまもなく雪が降ると言われています。

シマエナガ

キビタキ

オオルリ

キビタキとオオルリ

姿も美しく、鳴き声も良いことから探鳥会（バードウォッチング）ではスターとなる鳥たちです。両種とも夏鳥でキビタキは本学構内や市街地の公園緑地でも繁殖し、オオルリも5月上旬の渡りの時期には一時的に平地の公園などでも見られます。キビタキもオオルリもオスは写真のように目立つ色合いですが、両種のメスはオリーブ色の目立たない色合いをしています。

野生生物保全管理技術養成事業

https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity

リーフレット作成協力、資料および写真提供（五十音順）

浅野浩史、大澤萌、佐藤尚道、高橋良江、広沢圭司、松本朋華、柳川久（文責）、渡辺晋二

2024/5/15